



「この一年、「身じまい」とか、「墓の引越し」「改葬」というタイトルの雑誌の記事をよくみるようになった。多くの人が気にしているテーマなのだろう。お墓研究の第一人者、長江隆子・聖徳大学教授(81)は「人生最後の宿題」と言った。宿題なのだから、やらずにいたら教室のすみ立たされる。ただ、先生の話聞いていたら、改葬のニーズが増えたのは必然だという気がしてきた。

戦後、集団就職時代。地方から職を求めて、「花の都」に人が集まる。戦後生まれの団塊世代は、昔なら「家」を守った長男長女も、首都圏や中部・阪神圏の大学に入り、そのまま残った。親の世代は郷里「へん」な。団塊世代はいま65歳を超えた。故郷の墓を承継するのか。郷里のお寺の墓で檀家を続けるのか。そもそも墓参りに頻繁に行くのかどうか……多くの人が悩み始めている。

お墓を移す改葬は、役場への届出数から、1年間に約7万件あるとされる。だが、実態は不明。そこで都立八柱霊園(千葉県松戸市)前の墓石屋三代目社長でもある長江先生は、昨年春、石屋仲間のネットワークも利用して、墓地返還・改葬の実態調査をした。この調査がすごいのは、石材店の協力を得たことで

改葬は「人生最後の宿題」

「改葬理由」まで聞けたことである。結果、10のタイプに分類できた。

- ①墓参しやすくなるため故郷の墓を自宅の近所に移した
- ②故郷の霊園は山場になって墓参しにくいので近くに移転
- ③一人娘が独身などの理由で承継できないため墓を解体し納骨堂や永代供養墓に遺骨を入れた
- ④事情は「③」と同じ。遺産管理者である弁護士が家説に改葬を求めた
- ⑤妻側の実家の墓を移転、改葬して「両家の墓」を建立
- ⑥実家の墓の承継を長男にこだわらず、次男が改葬
- ⑦宗教、宗派替えて寺院墓地から公営や民営に改葬
- ⑧高齢の親のために、車椅子が利用できる霊園に改葬移転
- ⑨承継者がいないので、妹家族の隣接墓地に改葬移転
- ⑩墓はあっても不便なので、子供が墓参しやすいうように移転

つらつらながめているだけで、なんだかそれぞれの事情が浮かんでくる。いいことも、哀しいドラマも。④のケースは少々複雑で、実家には資産があったが、一人娘が遺言を残さず急死してしまった。相続人がいなかったため、家裁での協議の中で、「身じまい」して代々の遺骨は永代供養墓に入れるよう決まったケースという。断取りがないときは、やはり遺言が大事ということなのだろう。

戦後、地方を出て人口が都市部に集まった以上、改葬は当たり前だ。いや、実際墓を移さなくても、親の死を考えたとき、ひとつの決断を迫られる。だから、先生がいうように「最後の宿題」なのである。